

まい 埋やち

No. 26

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
平成24年3月27日
2012/03/27

古代の技 ” 兵庫鎖 (ひょうごぐさり) ”

西山遺跡の調査

昭和60年8月、市のほぼ中央に位置する西山遺跡で、建設工事が計画されたため、遺跡の発掘調査が行われました。

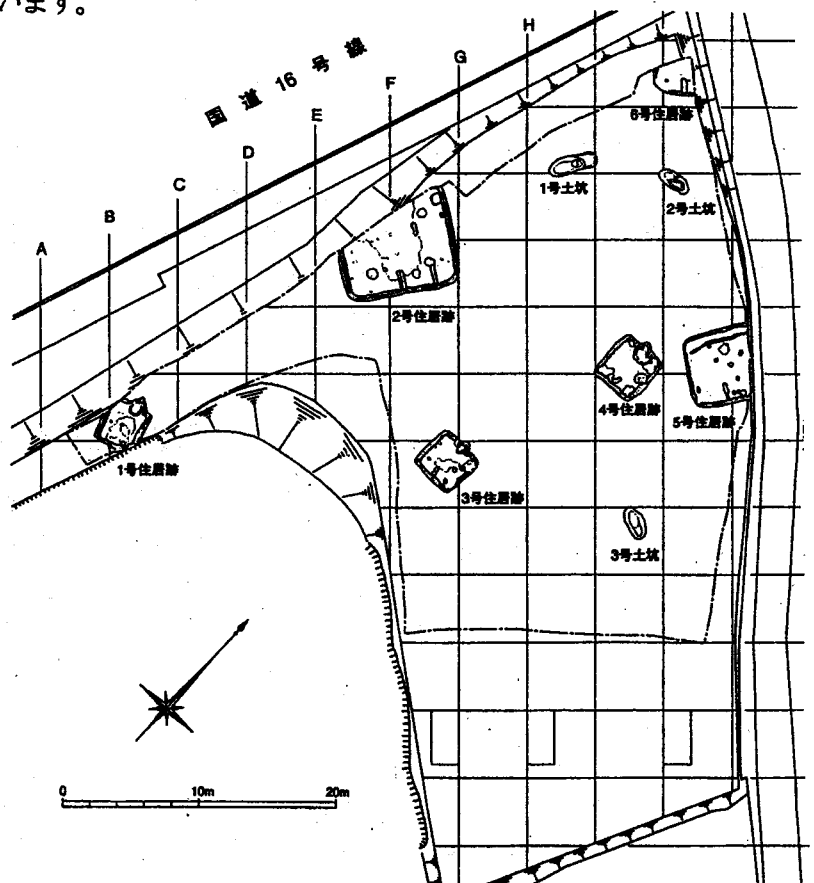
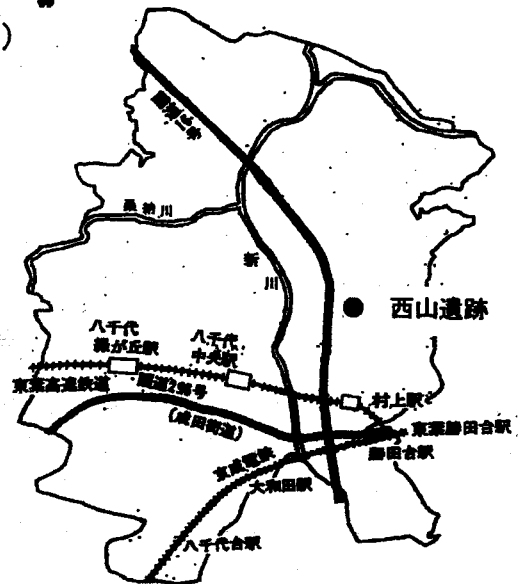
西山遺跡は、新川の右岸に流れ込む小さな谷を200mほどさかのぼった台地の先端に立地していました。現在は、調査区域の西側に国道16号線がとおり、南側に村上団地がせまっています。古の情景を偲ぶことはできません。また、周辺ではここから南にわずか900mほど離れたところで村上込の内遺跡の調査が行われ、家の跡が150軒以上もある大規模な集落が発見されています。

西山遺跡の発掘調査は、約1000㎡の狭い区域でしたが、古墳時代の前期(今から1600年ほど昔)の家の跡が2軒、平安時代のはじめ(1200年ほど昔)の2軒の家の跡など、集落の一部が発見されました。

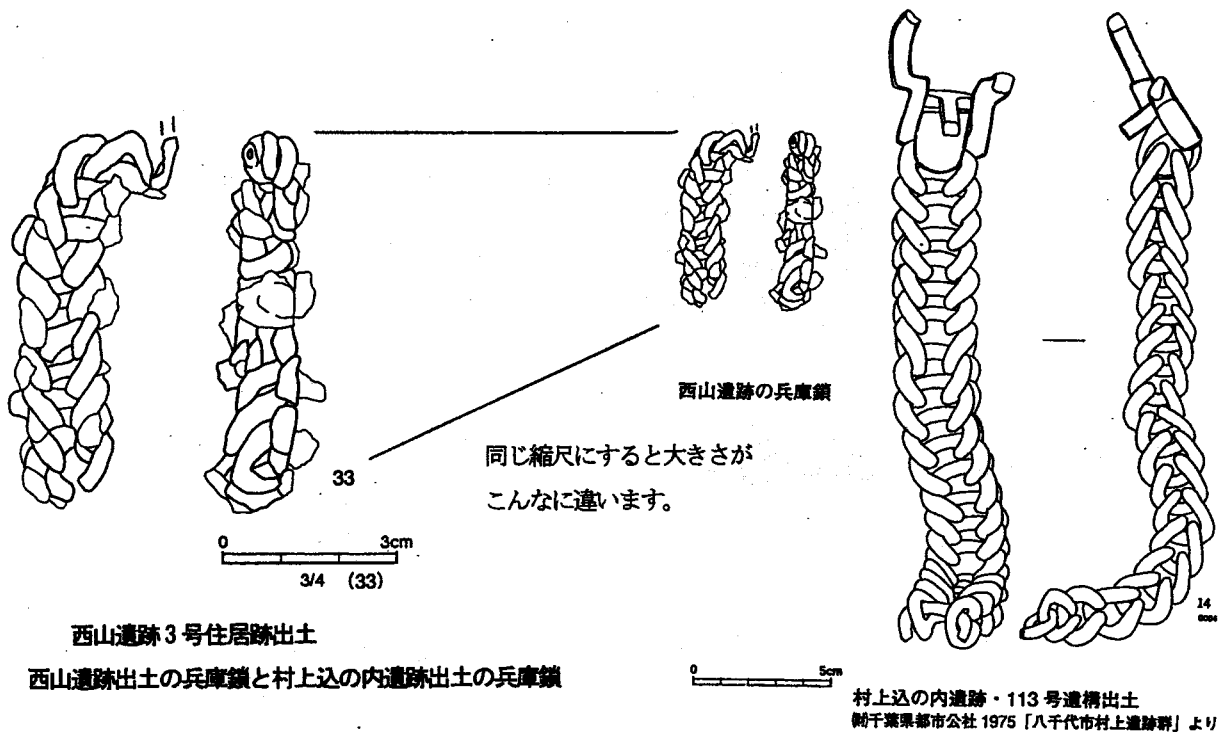
古代のくさりが出土

この遺跡の平安時代の家の跡から金属製(鉄製)のくさりが発見されました。家の隅の床近くから出土したため、家が使われなくなって、早い時期に捨てられ、土の中に埋まってしまったと考えられました。

発見当時は、さびなどが着いていてどんな金属製品であるかは、はっきりとしませんでした。でも洗浄して、さびなどを取り除いていくと金属の環をつなげた鎖(くさり)であることがわかってきました。



第1図 西山遺跡の検出遺構



西山遺跡3号住居跡出土
西山遺跡出土の兵庫鎖と村上込の内遺跡出土の兵庫鎖

村上込の内遺跡・113号遺構出土
朝千葉県都市公社 1975「八千代市村上遺跡群」より

発見された兵庫鎖

この鎖は、長さが約6.6cm、最大幅が約1.5cm、重さは約21gありました。一方の先端は曲がって引きちぎられたように、伸びきっていて、もう一端もつなげた部分が欠けてしまったようでした。鎖の厚みは約1cmありましたが、土やさび

などを取り除いてみると、なぜか、上下両面ともに平らな状態のままであるように見えました。

この鎖は径が4mmほどのやや太い金属を環にしたものを10個ほどつなげて作られていました。でも、何に使われたのかはわかりませんでした。

市内でも見つかった兵庫鎖

西山遺跡の近くにある村上込の内遺跡でも、家の跡から兵庫鎖が出土していました。長さが約30cmで、重さが350gもありました。金属(鉄)の環が20個ほどつながり、端にはベルトのバックルのような留め金の破片が残っていました。

報告書でも馬具の一部とされていますが、馬に乗るときに足をかけるあぶみ(鐙)とくら(鞍)とをつなぐものの一部と考えられました。

西山遺跡で出土したものと比較するとその大きさに大きな違いがあることがわかります。

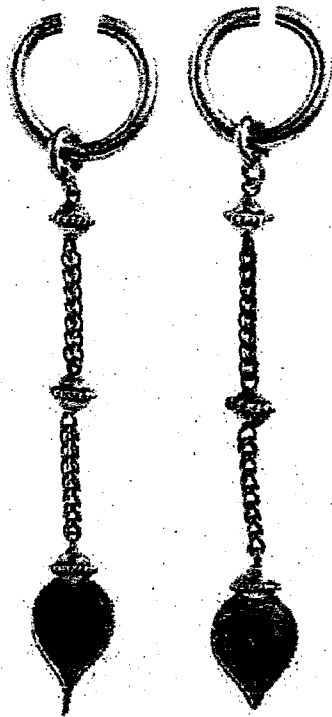
兵庫鎖の名前と歴史

兵庫鎖の名前は、太刀(たち)の帯執(おびとり)に細く編んだ鎖を何条も平組みに組み上げたものを用いているものを兵庫鎖太刀(ひょうごぐさりのたち)と呼んでいたところからきています。

兵庫は兵具(ひょうぐ)が変化した言葉とされ、兵士の道具という意味もあるようです。帯執は緒(お)と太刀をつなぐところを指します。平安時代の終わり(約800年ほど昔)から鎌倉時代(800年~700年ほど昔)にかけて流行しました。

造りが厳つく公家や武士にもてはやされ、実際に身につけられていました。後に儀式で使われるようになり、さらに寺社への奉納品となりました。

この時代よりも古い遺跡や古墳から、この鎖を用いた馬具の鐙(あぶみ)や轡(くつわ)、さらに垂飾付耳飾(すいしょくつきみみかざり)が各地で出土しています。名前よりも古い時代からあった技術のようです。そして、これらは朝鮮半島とのつながりを色濃くうかがわせるものでもありました。



上写真 姫路市宮山古墳出土
垂飾付耳飾り 愛媛市HPより

姫路市 宮山古墳の副葬品で長さ約8cm
この古墳の出土品は一括で国の重要文化財に指定されています。古墳は直径30m、高さ2mの大型の円墳で、3基の竪穴式石室がありました。この垂飾付耳飾り1対は金製で、このほかにも別の石室から12cm~13cmほどの長さの垂飾付耳飾りがもう1対出土していました。

右写真

井上嘉平商店HPより

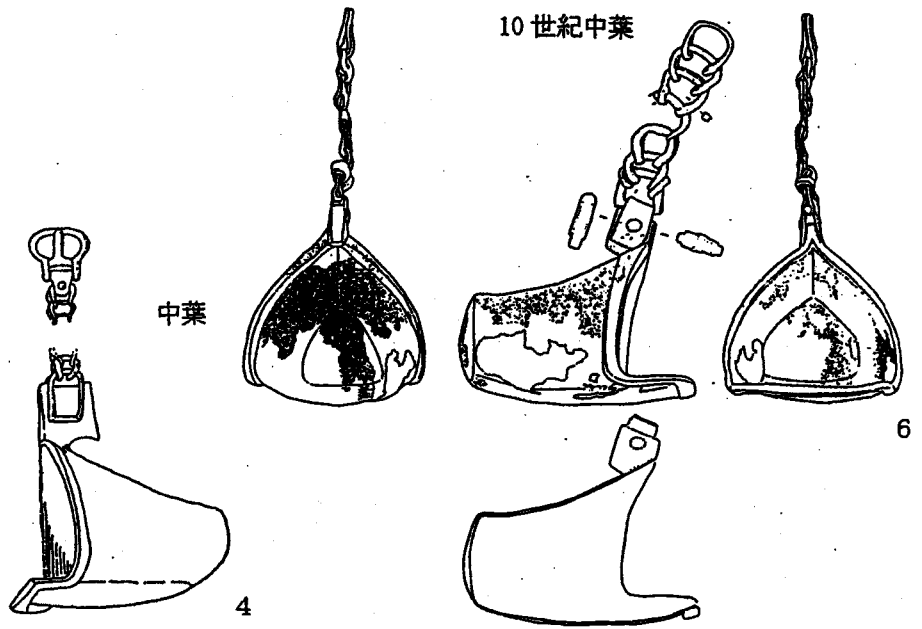
兵庫鎖の部分です。現在も作製されているものです。緒とつながる部分の構造がよくわかります。

右図

「図説 歴史散歩事典」より

1995 監修 井上光貞ほか

この解説書では「兵具鉾」と表現しています。



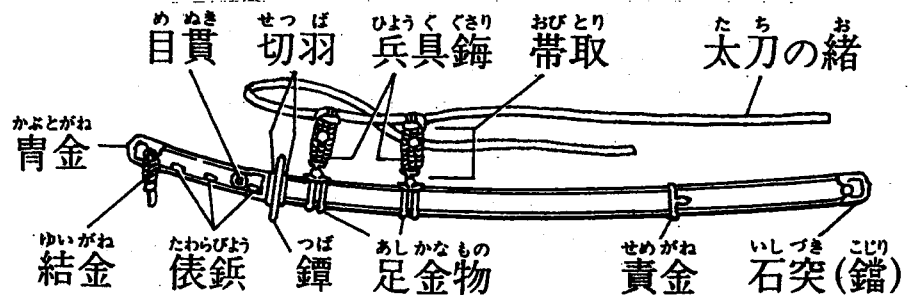
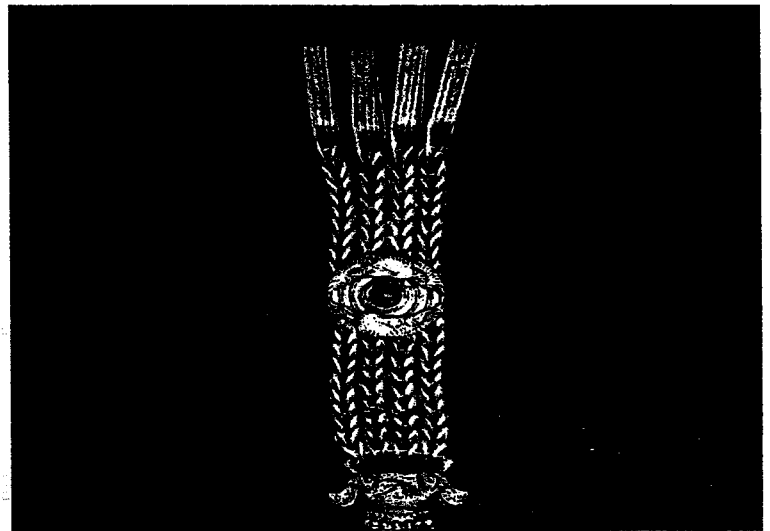
上図 「鉄製壺鐙」 左 正倉院蔵 右 市川橋遺跡出土

『古代鐙の変遷とその意義』より

「研究紀要」18号2010 (財)とちぎ生涯学習文化財団

左は正倉院の鐙は八世紀の中ごろに作られたと考えられています。鐙と鞍をつなぐ兵庫鎖とバックルの部分で鉸具(かこ)や刺金(さすが)がよく残っている例です。

右は宮城県 多賀城市 平安時代の河川跡から出土したものです。鐙の表面には黒色の漆が塗られ、兵庫鎖もよく残っています。十世紀の中ごろのものと考えられています。

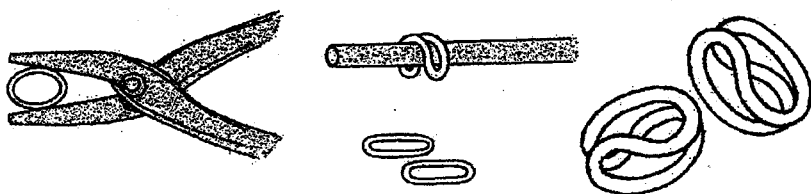


兵庫鎖の作り方

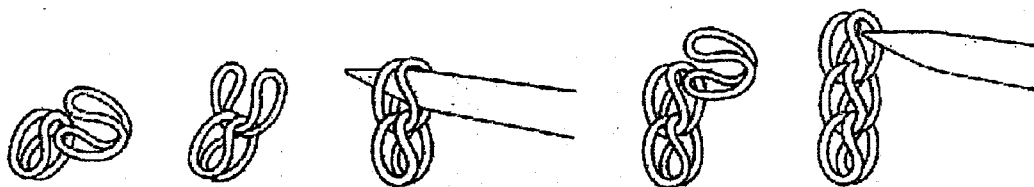
兵庫鎖を英語では Loop In Loop Chain といいます。現在でも、ネックレスなどの装飾(そうしよく)品で使われているようです。現在の技術ではこのような小さなものでも比較的かんたんに作ることができますと思いますが、千年以上も昔の技術では大変だったと思います。現在でも行われている作り方を知ることによって、当時の苦勞をすることもできるかもしれません。

鎖を使う目的とするものの大きさに合わせて、金属の環をたくさん作ります。金属を環にするために“ロウ付け”*1をします。そして、その環を①のような形に折り曲げていきます。折り曲げた金属の環を、②のように、交互につなげて鎖状にしていきます。さらに、この鎖を何条も組み合わせて豪華(ごうか)な鎖にする技法もあります。

*1 金属と金属をつなげるために、柔らかい金属を溶かして接着剤(せっちゃくざい)として用いる方法



① 金属を環にして、折り曲げる。



② 折り曲げた部品を交互につなげる。

「夢通信」平成18年12月 『兵庫鎖を作る』より衣川製鎖工業(株)HPより

参考文献

「西山遺跡」2011 八千代市遺跡調査会

「八千代市村上遺跡群」1975 (財)千葉県都市公社

「古代燈の意義とその変遷」津野 仁 『研究紀要』第18号2010 (財)とちぎ生涯学習文化財団

「図説 歴史散歩事典」1995 監修 井上光貞ほか

垂飾付耳飾り・兵庫鎖太刀の一部・兵庫鎖の作り方などはそれぞれのホームページより引用させていただきました。

— 編集後記 —

前号で予定していた内容を、急きょ変更しました。次号以降にご期待ください。

西山遺跡で出土した兵庫鎖が何に使われていたものなのか、よくわかっていません。

轡や燈などの大型の製品ではなく、とはいっても、耳飾りなどの小さなものでもないようです。では、一体何なのか、たいへん興味深いところです。ぜひ、皆さんも一緒に考えてください。(秋山 利光)

埋(まい)やちよ No26

—千葉県八千代市埋蔵文化財通信—

平成24年3月27日 第1版発行

編集・発行 八千代市教育委員会

教育総務課 文化財班

八千代市大和田138-2